＊湘南遺産プロジェクトHP＊

湘南の由来
ショートショート
第５話-３

“湘南”という地域呼称はどこから来たのか？ その疑問に迫るショートショートの第5話

えと文　和田精二　2022,7,20

5-3 3度も頓挫した“湘南市構想”

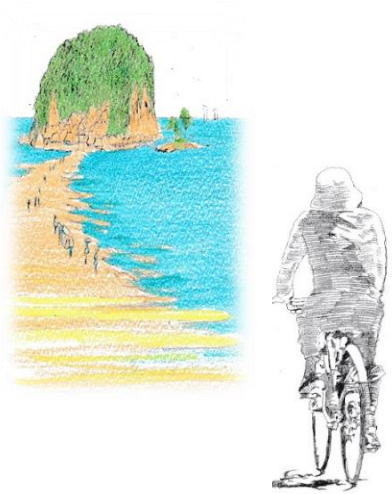
湘南の市町を集めて“湘南市”をつくろうとする企てを“湘南市構想”と定義したとき、
その企てが3度もあったことが年表から浮かび上がって来た。
戦後の相模湾沿岸市町の合併問題に“湘南”が引っ張り出された結果だが、
皮肉なことに“湘南市構想”は１度も成功していない。
人気のある“湘南”は今後とも引っ張り出されるに違いない。

“湘南市構想”は3度沈没する

“湘南市構想”の失敗例としてよく知られているのは、平塚市を中心に展開された事例であるが、

藤沢市や寒川町を中心に展開された事例はあまり知られていない。

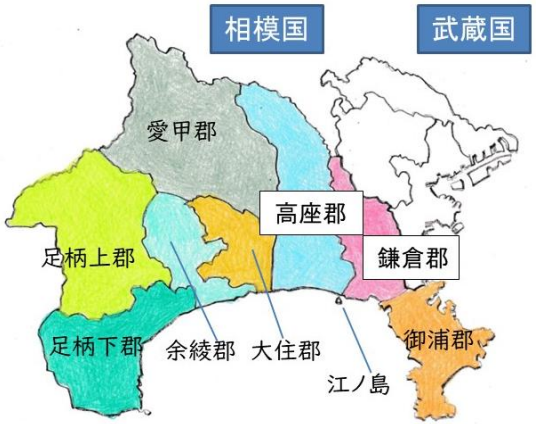
それもそのはずで“湘南”の人々の記憶に残るにはあまりに限定された地域内の刹那的な出来事だった。



藤沢町の新市名候補 に登場した“湘南市”

藤沢市に関わる“湘南市構想”について説明するには、藤沢町と鎌倉町の間で繰り広げられた“江の島争奪戦”の話から始める必要がある。

その顛末をなぞってみる。

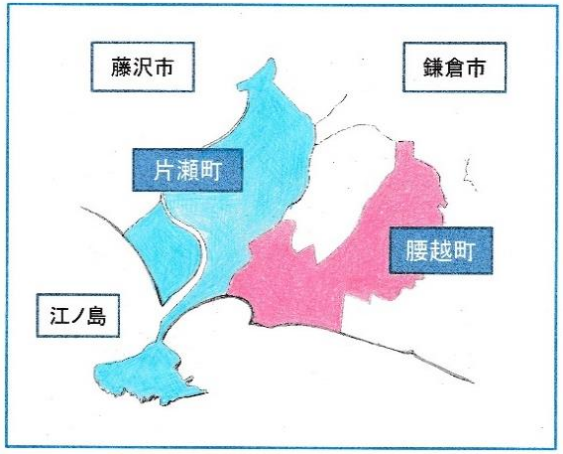


大化の改新後に相模国8郡と武蔵国3郡の11郡に分けられた神奈川県下は明治以後大きく変動していく。

昭和8年(1933)に“都市計画法”が改正されると、相模湾沿岸部に町村の合併機運が高まっていく。

すばやく動き出したのが 2年前から準備してきた鎌倉町。

鎌倉町は 周辺の町村と合併し“大鎌倉市”をつくりあげる機会を虎視眈々と狙っていたのである。



片瀬と腰越は大化の改新後の長きに
渡り、高座郡と鎌倉郡に属して来た

鎌倉町の動きにあわてた藤沢町は ”江の島” を擁する“片瀬町”を
取り込もうと 片瀬町と合併交渉を始める。

名所史蹟に彩られた”江の島”は観光資源のドル箱として鎌倉市も
藤沢市も 喉から手が出る程欲しい。

その”江の島”を擁する片瀬町は、人口7,400人を誇っていたが、
開発が進むにつれて手狭になり、工業化を推進する藤沢との
合併を望む声が高まっていた。

龍口寺のある龍口は江戸初期からたびたび
周辺の津村・腰越村・片瀬村の間で境界論争
が行われたが安永2年に片瀬村に所属する

昭和9年、片瀬町は隣接する腰越町と合併し、鎌倉町とは別に単独で
都市計画法の適用申請を行うべく 交渉するが失敗する。

長い時代 高座郡に属して来た片瀬町と 鎌倉郡に属して来た腰越町が
一挙に合併するには無理があった。

その結果、腰越町は鎌倉町に急接近、昭和13年(1938)に
大船や深沢などと共に鎌倉町と合併し“鎌倉市”を誕生させる。

鎌倉町が将来ビジョン“大鎌倉市構想”を着実に推進させるのを横目で見ながら、将来構想を持たない藤沢町が画策したのは、

合併後の新市名を“藤沢市”とするとともに 片瀬町との合併により是が非でも“江の島”を手に入れることだった。

“江の島”を取り込みたい藤沢町は 新市名“藤沢市”案が拒否された場合に備えて 2つの新市名候補を用意する。

湘南中学校、湘南水道㈱、湘南瓦斯㈱、湘南農園、湘南自動車合資会社、湘南株式店、湘南花園、湘南養蚕組合、湘南鶏園、湘南煙草小売組合、湘南産婆会、湘南荘（分譲地）

昭和8年出版の“現在の藤沢”に掲載された“湘南”を冠した団体や会社名

ひとつは、2つの地名を繋げて丸く収める“藤沢江の島市”、

そして、もうひとつが、そのころの藤沢町民の“湘南”好きに呼応した“湘南市” であった 。

藤沢と片瀬の町民が共に納得できる呼称案として、“湘南市”が公の地名候補としてはじめて登場したのである。

戦時中に民間の寄付で献納された海軍艦上戦闘機を報国号と称したが、藤沢町有志が献納した戦闘機は“湘南報国号”と命名された

しかし、片瀬町は “江之島市”を強く主張して譲らず、合併話は暗礁に乗り上げる。

一方、藤沢町にはもう一つの極めて大きな目標として、

“市制施行” と同じタイミングで、神武天皇即位の年を元年と定めた紀元に基づく“皇紀2600年記念事業の実施”を掲げていた。

昭和10年頃の広告“藤沢湘南荘分譲地” 小田急線藤沢本町駅西側の伊勢山から石名坂付近まで分譲予定だったが海軍飛行場に徴用され計画は中止に

昭和15年(1940)、藤沢町は 片瀬町の同意を得られないまま、新市名を“藤沢市”とすることを単独決定、

市制施行と皇紀2000年記念事業を目標通り執り行う。

ところが、事態を見守っていた鎌倉市が 翌年、鎌倉市の将来ビジョン“大鎌倉市構想”をもとに片瀬町に合併を申し入れる。

江島神社の辺津宮境内八角のお堂に
安置されている八臂（はっぴ）弁財天

藤沢市もこれに負けじと片瀬町に合併を申入れ、10年にわたる
“江の島争奪戦” が始まる。

一方、片瀬町民の多くが藤沢町との合併を望んでいることが
判明し、片瀬町は 新市名“藤沢江の島市”を受け入れてもよい
ことを藤沢町に申し入れる。

申入れを受けた藤沢市が “藤沢江の島市”で合意し、
片瀬町が合併を受諾すると、またしても 鎌倉市が
猛反発する。

医師高田畊安が創設した東洋一のサナト
リウム・南湖院も戦後進駐軍に接収される

藤沢市、鎌倉市間の熾烈な“江の島争奪戦” に対して 神奈川県が
両市に合併活動の中止を勧告、

同時に “藤沢江の島市”は長すぎると言う理由で拒絶する。

そうこうしている内に日本は大東亜戦争に突入、“江の島
争奪戦”はいったん棚上げされる。

そして、昭和20年（1945）8月、終戦を迎えるのである。

頓挫した湘南市構想　その１

藤沢市の戦後は都市化による発展を若き実業家に託すことから始まる。

託された実業家は、当時、全国有数の土木建築請負業　飛島組の社長飛嶋繁（しげし）。

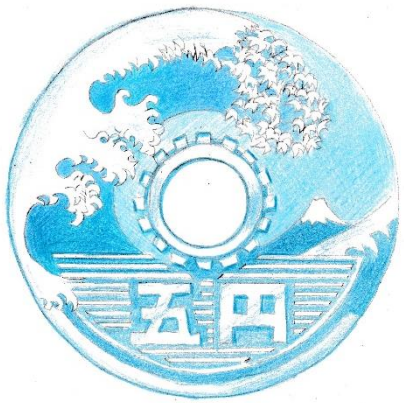
昭和7年(1932)に飛島組の実質創業者である実父 飛嶋文吉が貴族院議員に当選したことを期に社長となり、短期間に大きな実績を上げたが、その経営手腕に藤沢市民の熱い期待が寄せられる。

藤沢市第3代市長 飛嶋繁（しげし）は
突然“湘南大都市構想”を打ち出す

飛嶋への期待は藤沢市だけでなく、合併が宙に浮いたままの片瀬町でも高まり、飛嶋を町長に迎えようとする動きすら生まれる。

昭和21年(1946)4月に再開された藤沢市議会で“名誉職市長条例”が制定され、6月に若干39歳で飛嶋が藤沢市長に就任、

翌年、藤沢市で第1回の市長公選が実施され、無投票当選する。



“湘南“が結ぶ”ご縁“で解決？

市長就任後の大仕事が片瀬町との合併問題だったが、

市長の手腕に期待する片瀬町民の59%が藤沢市との合併に賛成したため、昭和21年10月、藤沢市に合併を申し入れる。

藤沢市が合併を受諾、市名も“藤沢江ノ島市”ではなく“藤沢市”で決着、

藤沢、鎌倉間の10年にわたった確執が飛嶋市長の元で解決する。

昭和21年(1946) 11月、飛嶋市長は突然“湘南大都市構想”を発表。

“百年の大計をたてて小事にこだはらず、従来の小都市とは形のちがった近代文化都市建設の構想を以って進んでゆきたい”と、前置きし、

戦前からの“大藤沢構想”をさらに発展させ、鎌倉・藤沢・茅ヶ崎・平塚・寒川付近を一体的に開発、横浜市と並ぶ県の中心地を目指す”と宣言、

横浜市が特別市制を施行した後は“湘南大都市”を神奈川県の中枢地とし、県庁を当地区に誘致する、という大胆な構想を打ち出す。

湘南市構想が出た翌年、現在の相模原市に
“湘南小学校”が開校（図は2017年の風景）

しかし、公共施設整備のために藤沢振興会社の設立が計画され、
藤沢市が大きく羽ばたこうとした矢先の昭和22年(1947) 5月、

飛嶋市長が突如 腎臓炎を理由に辞表を提出する事態が発生、

市議会一致の留任懇請で一旦は辞表を撤回させるが、翌年2月、
再び辞表を提出、辞職が確定する。

市長在任期間20か月のあっけない結末に最も大きな衝撃を
受けたのは片瀬地区住民だったと当時の新聞が伝えている。

昭和21年に始まった占領軍による上陸・爆撃
演習で標的とされた烏帽子岩は先端部が砲撃
で削られてしまう

辞めた理由は、終戦時に片瀬海岸陣地構築用材が第140師団から
片瀬町に譲渡された後、飛島組に無償譲渡された問題や、

米国から払下げた数千枚のトタン板の使途不明問題が市議会で
追及されたためとされる。

こうして飛嶋は藤沢市長を辞職するが、翌年、福井県で衆議院議員
当選を果たす。

ダイナミックに変身する飛嶋繁とは いかなる人物だったのか。

青函トンネルの難工事は映画化され、
高倉健や三船敏郎が銀幕を飾った

飛嶋が社長を務めていた飛島組（その後飛島建設に社名変更）は、青函トンネル、飛騨トンネルなどの難工事を完工した他、熊谷組や前田建設工業を独立させた土木主体の企業として勇名を馳せた。

一方、飛嶋は昭和20年、空襲で東京の自宅を焼失後、藤沢市辻堂・浜見山の2000坪の邸宅に居住するが、市長就任前後に藤沢市に対して数々の寄贈を行っている。

寄贈例として武道場（現在、藤沢公民館分館済美館）、藤沢郵便局庁舎敷地、辻堂昭和通りの舗装、辻堂小学校建築支援等がある。

“湘南市構想”沈没 その1

突如として飛び出した“湘南大都市構想”は、終戦直後の未秩序な社会に対して、個性の際立った人物による土木・建築業界的な大胆な発想の産物と理解すると腑に落ちる。

“湘南”を冠した都市構想の第1弾は人々の記憶に残る間もなく 消えてしまうが、ここでは “湘南”を冠した都市構想が存在したと言う事実に注目しておきたい。

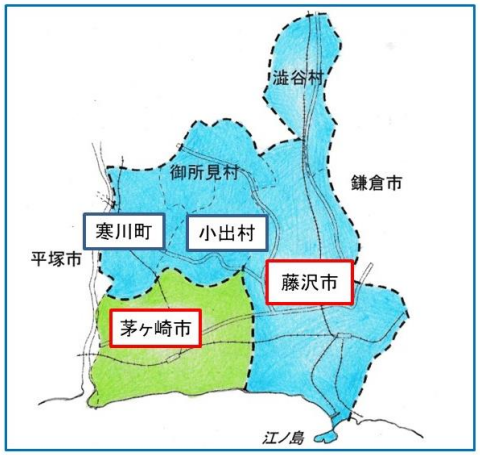
文字通り スケールの大きな “湘南大都市構想”だった。

頓挫した湘南市構想　その2

昭和28年(1953)、町村合併促進法が施行され、向こう3年間に全国の8,000人以下の町村を3分の１に減らすと言う強烈な目標が示される。

茅ケ崎市北部や藤沢市西北部には寒川町、小出村など8,000人以下の町村が存在していたので、

当然、該当する地域で町村合併が真剣に検討される。



“藤沢市と隣接町村との合併構想図（昭和28年11月現在）”より作成

皮肉なことに、同法の施行にいち早く反応したのは町村よりも市域の拡大を目指していた藤沢市と茅ヶ崎市。

市による周囲の町村合併が合法化されていたため、両市が積極的に動き始め、先ず茅ヶ崎市、次に藤沢市から寒川町へ合併の申入れがなされる。

同時期の昭和29年(1954)、高座郡南部でも合併問題が遡上に上がり、藤沢市、茅ケ崎市、寒川町を合併させる“湘南市構想”が浮上する。

しかし、小出村の合併を巡って 藤沢市と茅ヶ崎市が激しく対立、“湘南市”構想に向けた機運が次第に遠のいていく。

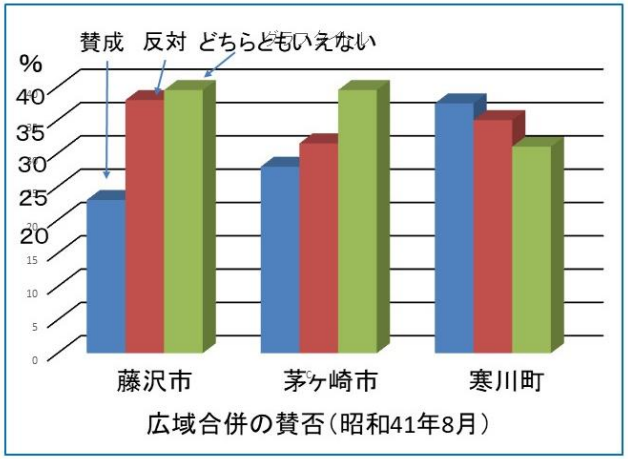
“湘南市建設研究会”の発足を伝える地域の新聞

ところが、藤沢市へのいすゞ自動車等の工場進出を見守っていた寒川町が、寒川町単独では同様の発展が困難と見て、藤沢市と茅ヶ崎市に2市町の合併を提唱するが、

藤沢市が茅ヶ崎市の赤字財政に難色を示し、“湘南市構想”は白紙に戻される。

この間、藤沢市は小出村等を分割合併していくが、藤沢市の面積は増えても人口・行政・財政上の改善は未達のまま。

町村合併の意味を問う声すら挙がっていた。



昭和41年に実施された広域合併の賛否調査結果（湘南広域都市行政協議会による住民意識調査報告書）

一方、寒川町は“湘南市構想”に対する思いを立ち難く、昭和30年(1955)、再び 藤沢市と茅ヶ崎市に呼びかけて“湘南市建設研究会”を発足させる。

しかし、その後の活動は停滞、地域新聞の社説に皮肉られる。

“その後 茅ヶ崎、藤沢市とも、市長はじめ市会議員等の熱意が無いため、その実現の可能性はうすくなり、先ず九分通り出来ないことになりそうな形勢にある。”

“湘南市構想”沈没 その2

続けて、

“今回の湘南市建設も、市民の間には、いつかは必ず実現するものであり、また実現さすべきものであるといわれていながら、ついに今回も、見送られようとしているのは、1人の市長も、1人の議員も、自ら進んで市民のためにつくそうとする熱意と純情のあるものがいないためである。
（湘南新聞S31.11.25）

相模湾に向けて大きく開放された“湘南“のイメージとは裏腹に、2度目の“湘南市構想”は 何ともスケール感に欠けるものだった。

頓挫した湘南市構想 その3

商社マンを5年間経験した吉野稜威雄（いつお）は自民党中曽根康弘の秘書官や渡辺美智雄派の事務局の局次長を務めた後、平成7年(1995)、平塚市長選に挑戦する。

3期12年、平塚市長を務めてきた石川京一に挑戦し惜敗するが、4年後の平成7年(1995)に再挑戦し、市長の座を射止める。

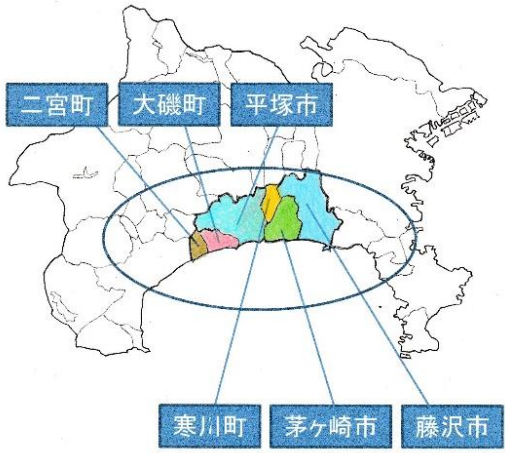
“湘南市構想”に政治生命を賭した
吉野稜威雄（いつお）

吉野は在任中にふるさと歴史再発見事業をはじめ、木谷實や村井弦斎（第4話で紹介）の功績に光を当てるなど歴史文化事業にも注力する。

吉野市政4年後の平成11年、吉野以外に立候補者が現れず、2期目の市長選は無投票当選となる。

4年後の平成15年（2003）4月、任期満了を前に、またしても他の立候補者が現れず再び無投票3選が予想されたが、

市長選に“湘南市構想”が絡んで、天地がひっくり返る。



“湘南市研究会”に参加した3市3町

以下、天地がひっくり返った一大事の顛末。

2000年代の始め、全国に“平成の大合併”が吹き荒れる。
しかし、神奈川県内の動きは鈍く、津久井郡の4町が相模原市に合流しただけだった。

そんな中、相模原市と同じく人口100万人規模の都市に与えられる政令指定都市を目指したのが平塚市長 吉野であった。

吉野は、他市町との表立った調整を行わず、いきなり平成14年(2002)、政令指定都市を目指す大方針を掲げる。

“湘南市研究会”参加市町と縄文海進時代の湾内や湾岸エリアがほぼ重なる

大方針とは、平塚市、藤沢市、茅ヶ崎市、寒川町、大磯町、二宮町の3市3町を合併させ、政令指定都市“湘南市”を目指す“湘南市研究会”を発足させることだった。

藤沢市は早々に機は熟しつつあると賛同し、大磯町、寒川町、二宮町も研究会に参加する。

だが、肝心の茅ヶ崎市が異を唱え、研究会参加を拒否、オブザーバー参加となる。

平成14年度に作成された“湘南市研究会”の報告書

平成15年(2003)4月までに研究会が9回開催され、10年後の理想のまちづくりビジョンが検討される。

一方、平塚市が独断で“湘南市研究会”をスタートさせたことに対し、茅ヶ崎市民の一部が反発し、同調者が増大していく。

市の行政として乗り気だった藤沢市でも反発する市民が増大、藤沢市民と茅ヶ崎市民が連合した“合併反対・湘南市構想反対”の運動が発生する。

平塚市長選に突如出馬した
女性候補・大藏律子

こうした中、平成15年(2003)4月に平塚市長の改選時期を迎える。

吉野は任期満了を前に早くから3選出馬を表明するが、他の出馬予定者が現れず、前回の市長選同様、今回も無投票で再選されるものと誰もが予想する。

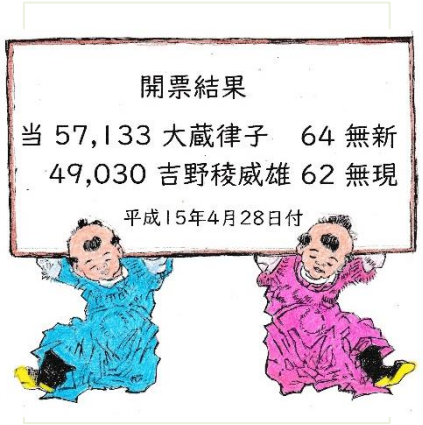
ところが、告示2か月前、平塚市長選史上初の女性候補“大藏律子”が突如として名乗りを上げる。

大藏の当選を報じる朝日新聞
夕刊記事

大藏律子は、昭和54年に立ちあがった“場外馬券売り場の建設に反対する母親の会”が発展した“平塚母親の会”を推薦母体に市議会議員に当選、議員を4期務めて来た人物。

男性上位の風土が根強く、保守王国と呼ばれて来た平塚市で、出馬表明から投票までわずか2か月余の短期決戦に臨むことになる。

藤沢市・茅ヶ崎市の“湘南市”反対運動の高まりを身近に感じている内に“湘南市構想”に反対することが平塚市長選の勝利に直結することに気付いた可能性が強い。



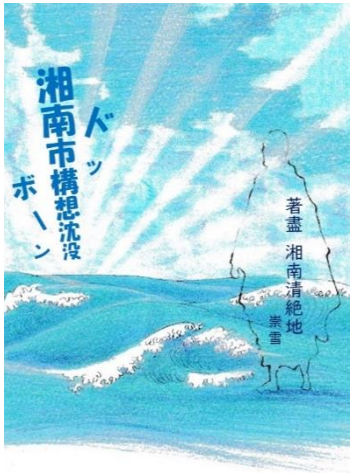
結果が重たかった平塚市長選

予想通り、市長選は“湘南市”実現を目指す吉野と“湘南市”の白紙撤回を主張する大蔵の戦いの構図となる。

そして、大蔵が吉野に8000票の差をつけて市長の座を獲得する。

“湘南市構想はお蔵入りさせたい。選挙戦を通じて多くの市民はこの構想を望んでないと肌身で感じた。”

選挙後の一般紙に掲載された大蔵の言葉である。



“湘南市構想”沈没 その3

統一地方選後、通算10回目の“湘南市研究会”が開催される。

山本藤沢市長が“同一歩調で研究会を進めることは困難”と発言し、服部茅ヶ崎市長も“凍結”の姿勢を打ち出したことで流れが決まる。

最終的に、大蔵新市長が“湘南市研究会”休止の宣言を行い、6市長が合意したことで、1年5か月にわたった研究会の解散が決定する。

前2回と違い研究会を重ね、周到に準備して来た筈の“湘南市構想”だったが、志半ばにして頓挫、3度目の“湘南市構想”が終焉する。

“湘南市”をタイトルとした映画の誕生。
2022茅ヶ崎映画祭招待作品“ショートショートシアターTHE湘南市”

後年、吉野が“政令指定都市構想”には山本藤沢市長の持ち掛けがあったこと、吉野と山本の間で一定の絵図が描かれていて、湘南市庁舎は平塚の見附台体育館の跡地を想定していたこと、などを語っている。

本件を取上げた情報誌の記事の結論が暗示的である。

“今のところ「湘南市」はあまり価値のない構想だ。
だが、三浦半島の退潮もある。とりあえず、将来の危機に対応するためのシミュレートとして、研究だけは続けておいたほうがいいのかも知れない。”

これでいいのか神奈川県 昼間たかし, 鈴木士郎編

さて、当シリーズは“湘南の由来”をタイトルに掲げ、“湘南”という地域呼称の由来を探って来ました。

ところが、由来を探る段階はとうに終わり、現在は“湘南呼称”定着の経緯を探っており、矛盾が拡大しています。

当初の目的を達成しているため、区切りの良い段階で連載に区切りをつけるべく、次回を以って完了にしようと思います。

宜しくご理解いただければ有難いです。　　和田拝

【引用文献・資料】

251;図:湘南遺産アーカイブ1“湘南年表”編、和田、202108,20改定
253;図:地図で楽しむすごい神奈川 都道府県研究会 洋泉社 2017
255;文:藤沢文庫5. 目で見る藤沢の歴史 藤沢文庫刊行会 名著出版 1980
258;図:(続)藤沢市史別編2 ニュースは語る二十世紀の藤沢190~1955
(続)藤沢市史編さん委員会 藤沢市長山本 2005
文:目で見る藤沢の歴史 藤沢文庫刊行会 名著出版 1980
259;図:浮世絵館だより Vol.13 藤沢市藤澤浮世絵館 2020,12月
文:藤沢市史研究 第17号 藤沢市文書館 1984
260;文:藤沢市史研究 第17号 藤沢市文書館 1984
261:文:湘南の逆襲 みつはし貴義 神奈川新聞社 1987
262;文:藤沢市史 第6巻 通史編 藤沢市史編さん委員会 藤沢市長 1977
263;文:藤沢市史研究 第17号 藤沢市文書館 1984、
藤沢市史 第6巻 通史編 藤沢市史編さん委員会 藤沢市長 1977、
264;文:藤沢市史研究 第17号 藤沢市文書館 1984
267;文: 藤沢市史 第6巻 通史編 藤沢市史編さん委員会 藤沢市長葉山
峻 1977、辻堂歴史物語 櫻井豊 デジタル・ジョブ 2013
267;文266;文:藤沢市史 第6巻 通史編 藤沢市史編さん委員会 藤沢市
長葉山峻 1977、藤沢市史研究 第17号 藤沢市文書館 1984
辻堂歴史物語 櫻井豊 デジタル・ジョブ 2013
268;文;辻堂歴史物語 櫻井豊 デジタル・ジョブ 2013
文:寒川町史7 通史編 近・現代 寒川町 2000
271;図:藤沢市史ブックレット回想の湘南昭和史50選,(続)藤沢市史
編さん委員会藤沢市文書館,2009
文: 藤沢市史ブックレット回想の湘南昭和史50選,(続)藤沢市史
編さん委員会藤沢市文書館,2009
272;図:湘南新聞 昭和31年9月15日 湘南新聞社 栗原光三
文:寒川町史7 通史編 近・現代 寒川町 2000
273;図:平成24年度藤沢市文書館企画展 藤沢・茅ヶ崎・寒川 2市1町の
絆 藤沢市文書館 2012、藤沢市史研究 第17号 藤沢市文書館 1984
文:湘南新聞 昭和31年11月25日 湘南新聞社 栗原光三
274;文:湘南新聞 昭和31年11月25日 湘南新聞社 栗原光三
275;文:平塚市史10 通史編近代・現代 平塚市博物館市史編さん担当
平塚市 2011
276;文:平塚市史10 通史編近代・現代 平塚市博物館市史編さん担当
平塚市 2011
277;文:日本の特別地域 特別編集76 これでいいのか神奈川県 昼間
たかし・鈴木士郎編 マイクロマガジン社
278;図:貝が語る縄文海進 増補版 松島義章 有隣堂 2006
279;図:みんなで考えよう!!湘南地域の21世紀のまちづくり /表紙
湘南市研究会発行 平成14(2002)年11月、
文:日本の特別地域 特別編集76 これでいいのか神奈川県
昼間たかし・鈴木士郎編 マイクロマガジン社 2017
280;文:平塚市史10 通史編近代・現代 平塚市博物館市史編さん担当
平塚市 2011
281;図:朝日新聞縮刷版 東京本社発行 2003年4月28日夕刊記事
文:平塚市史10 通史編近代・現代 平塚市博物館市史編さん担当
平塚市 2011
282:図:平塚市史10 通史編近代・現代 平塚市博物館市史編さん担当
平塚市 2011
文:朝日新聞縮刷版 東京本社発行 2003年4月28日夕刊記事
283:文:平塚市史10 通史編近代・現代 平塚市博物館市史編さん担当
平塚市 2011
284;文:タウンニュース平塚版 2019年4月4日号
日本の特別地域特別編集76これでいいのか神奈川県 昼間たかし,
鈴木士郎 kkマイクロマガジン社 2017
285;図:第11回茅ヶ崎映画祭特別招待作品 ショートショートシアターTHE
湘南市「作品 ショートショートシアターTHE湘南市 」製作委員会
文:日本の特別地域特別編集76これでいいのか神奈川県 昼間
たかし, 鈴木士郎 kkマイクロマガジン社 2017

❖第5話-3 完了
2022.07.20